

## 宇宙人

岐山高校 3年 吉村 貫希

「遅っせえな」

チツという舌打ちと共に後ろからそんな言葉が刺さり、思わず背筋が竦む。だけど私は一層ゆつくりと指を動かし、やっと財布から目当ての小銭を取り出した。あからさまな悪意を向けられて平然としていられるほど凶太い人間ではないけれど、凶太い人間の振りをするのは幾らか思考を冷静にさせてくれるのだ。

差し出された本を受け取り、足早にレジを出す。ここで振り向いて後ろの客に嫌味なスマイルでもしてやればいいのだが、そこまでする勇気は私には無い。

本屋を出ると、12月の乾いた空気が私の顔を叩いた。

目当ての新聞は手に入れた。後は、風呂の洗剤を切らしていたのだ。スーパーにいそいそと向かう途中、店のガラスに映る私は厚手のコートと猫背のせいで二足歩行のアルマジロに見えた。

突然、「……………あの、すみません」と後ろから声がかかった。

声の方向を振り返り、そこで私は、宇宙人を見た。

恥ずかしい事に、私は今まで宇宙人を見たことが無かったのだ。銀色の肌に棒切れのような手足、肥大化した頭に昆虫を思わせる黒々とした目を持つ彼らは、ネットやテレビではよく見るし、東京では日に何度か見かけることがあると友人が言っていた。ただ、こんな片田舎にはほとんどいない。

初めて見る目の前の宇宙人はスーツを着ていた。その姿は宇宙人元来の背の低さで子供のコスプレのようなちんちくりんさがあり、思わず吹き出しそうになったが、私は、私自身今アルマジロであることを思い出し踏みとどまった。

へんてこりんなサラリーマン宇宙人、いや宇宙人氏と呼ぼう。

「いや、あのですね、その…………。スーパーがどこにあるかを教えてもらいたいですけど…………」

宇宙人氏はいやに小さな声でそう言った。眉の無い銀色の顔が申し訳なさそうなしわを作る。

私は別に宇宙人に対して嫌悪感は無かったのだが、何故かここで「はい、いいですよ」と言うのがためらわれ、「ええ……………まあ……………」と曖昧な返事をした。

宇宙人氏は嬉しそうな表情で礼を言った。背の低さで私から見れば上目遣いになっている。宇宙人において上目遣いは小動物的な可愛さはなく、むしろ目の大きさが強調されて気味が悪いというのは、新たな発見だった。

やはり地方で宇宙人というのは珍しいのだろう。私と並んで歩く宇宙人氏は周りの視線を集めた。

思わず口に出した。

「やっぱり生きづらいですかね」

言ってしまったから後悔した。初対面の人に私は何を言っているのだ。

宇宙人氏はそれが自分に向けられた質問であることを少し時間をおいてから気付き、「ええ……、まあ……」と口ごもった後、こう言った。

「それは、ええ、確かにいわれのない理不尽な悪意を向けられることもありますかね。それは私が宇宙人であるからかもしれないませんが」

横断歩道に差し掛かる。信号は赤い。私と宇宙人氏は途端に押し黙った。

私はバッグから一本のペットボトルを取り出し、キャップを捻った。近くの自販機で十円で売っており興味をひかれたのだが、生憎千円札しか持っていないなかったのでお釣りの小銭で財布を埋めることになった。マンゴー紅茶と書いてあるが、そのくせベルからキャップまで真っピンクである。

宇宙人氏は冬だというのに、オジサンくさい動作でハンカチで汗を拭っている。髪の毛の無い銀色の頭から噴き出す汗は、そこだけを見れば綺麗に見えなくもない。

信号が青になり、歩き出す。

マンゴー紅茶は存外に美味しかった。あの自販機を覚えておこう。

「ええと、向こう山の方に両親が住んでいるんですけどね。少し前に温泉を掘り当てまして」

温泉ですか、はあ。私は相槌を打った。

「そこで温泉屋をやると言い始めまして、私は反対したんですけど。それがつい先日オープンしまして、今日はここまでそれを見に来たんです」

宇宙人氏はどこか遠い目をした。スーパールの看板が遠くに見えたが、宇宙人氏は多分それを見てはいない。

「それが随分にごわつてるじゃないですか。なんでも宇宙人の経営する宇宙温泉なんていうって、入れば宇宙人のようなすべすべ肌になると。いや、まさか自分の親にこんな商魂のたくましさがあるとは思いませんでした」

宇宙人氏はそこで、つと前を向いた。

「ええと、『生きづらいか』でしたっけね。私は口下手なのでうまく伝えるかどうか分かりませんが、私の生きづらさは宇宙人だからではなく、私自身の生きづらさだと、最近では思っております。ええ」

宇宙人氏をスーパールの前まで案内して別れた。少しして自分も風呂の洗剤を買おうとしていた事を思い出し、引き返した。

レジ前で見つけた宇宙人氏のカゴには、一番上に育毛剤が三箱乗っかっていた。

ガンツという音と振動で私は目を覚ました。あくびをしながら見渡すと教室の中には誰もいない。超局地的なパーメレンの笛吹でも起つたのだろうか、なんてくだらないことを考えていると、「あ、やっと起きた」と横から声がかかった。

色の褪せた髪を指で巻きながら、「もう移動教室みんな出てんのよ」とその友人は言い放つ。授

業中に寝てしまったところを机を蹴って起こしてくれたらしい。普通に起こしてくれればいいものを。

「しかし、寝るにしたって山田先生の授業で寝るの、前に授業中に寝た男子がめっちゃくちゃ怒られてるの見たでしょ？ホントあんたって何考えてるかわからない。まるで宇宙人みたい」

「そんなもんか」と私は思い、バッグからピンク色のボトルを取り出して、キャップを捻った。